慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	近世資本主義起源考続論（一）
Sub Title	
Author	阿部, 秀助
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1922
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.16, No.7 (1922. 7) ,p.939(51)- 947(59)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19220701-0051

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

有銀行の一事を除いて、他に之を見るを得ないであらう。即ち利益の爲めにのみ働く私的獨占を打破し、之に代うるに公共的利益を念とする國家的獨占を以つてするのは、今日の如き盛なる程度に合併を生じ、銀行獨占の狀況の現出せんとしつゝある場合に於て、當然の歸着點であると思はれる。唯國家的獨占は私的獨占の弊を回避する所以であるとしても、一方に私的銀行制度に伴う利益を保持するのに、如何なる工風を以つてす可きかと云ふことは、自ら別個の問題に屬するのである。私は此點に於ける議論を姑く他日に留保しようと思ふ。

近世資本主義起源考續論（一）

阿部秀助

一

白耳義の史家ピレンヌの商業說に加ふるに更に金貸業と戰爭とを以て近世資本主義發展の根本的要素と見做すものはブレンタノ教授である。而して同教授の意味する近世資本主義なるものは中世に於ける貨幣經濟の復活と共に歐洲に於て發達せし資本主義である。而して此資本主義は既に遠くフィニキア、希臘、トレメウス朝の埃及及第二ピュニック戰爭以後の羅馬に於て發達し其傾向は更にビザンチウム、帝國を經て遂に以太利及其他の歐羅巴諸國に及ぶに至つたと云ふことである。論者はブレンタノ教授の起源說を考察するに先ちて少しく以上擧げし諸國の經濟的發達に就きて叙述したいと思ふ。

ブレンタノ教授をして資本主義の初期を構成せしものと見做さしめたフェニ

キアの國土は其面積狹小なる上に之れが地味は埃及及バビロニアに及ばざりし結果、住民は自然に海上方面に發展して一時世界的商業の中心と化するに至つたのである。而して彼等の通商的範圍に就きては世に歴史家の鼻祖と稱せらるゝヘロドットはフェニキア人の亞弗利加周航を記述して居るのであるが、此事實は千九百八年下部埃及に於て發見せられた二個の遺物に記述せられた文字によつて明かに證明せらるゝに至つたのである、但、フェニキア人がヂブラルタルの海峽を越えて錫の產地たりし英國に赴きしとの説は最近、獨逸に於ける古代史の研究家として有名なるエヅァルト、マイヤーによつて否定せらるゝに至つたのである、又、フェニキア人が琥珀の產地であるバルチック海方面に赴きしとの説もレバノン山中に於て北歐產に似し琥珀が發見せられしことによつて其説の無價値が證明せらるゝに至つたのである、要するに彼等の通商的範圍は東部方面を除けば事實、地中海方面に限られしものでカヂツは彼等にとりて本國を去ること最も遠き殖民地であつたのである、更にブレンタノ教授をして第二の資本主義的國家と見做さしめし希臘は吾人が前に述べしフェニキアの場合と同じく其面積狹小なる上に地味肥沃ならざりしことは自から多數の人口を養ふこと能はざりし結果、殊に地中海の東部方面に多數の移住者を出すことゝなり、斯くして本國と之れが殖民地との間に漸次交通の頻繁なるにつれて、後者の住民は專ら希臘其者の工產物を、自國よりも文化の程度低き諸國に輸出せしことが、やがて希臘本土に於ける工業的活動に非常なる刺激を與ふるに至つたのである。就中、此點で有名なのはアテネである、彼のテミストクレスがアリスチデスの意見に反對してアテネの將來は海上に存することを主張せし際にアテネは急激に農業的國家から商工的國家に變化するに至つたのである、殊にイオニア人の叛亂は從來最も繁榮を極めた小亞細亞の西海岸を疲弊せしめしと共に、希臘の本土が再び政治上經濟上の覇權を握ることゝなり、又、ミレトが破壞せられしことは此方面に於ける商工業をして之れと同族的關係を有したアッチカ方面に移らしむるに至つたのである、尙ほ波斯戰爭はアテネを盟主としたデルフイ同盟の成立となり、之れによつて同市に流入した豐富なる資金は單にアテネをして政治上の有力なる地位に上らしめしのみでなくて、同時に商業上に於ても著しき發達を遂げしむるに至つたのである、即ち一

時、通商上の中心であつたチルスが衰微し、それと共に希臘の諸市が勃興せし場合に於てアテネは何時しか是等の諸市を凌駕して其勢力を占むるに至つたのである、殊にペリクレスの政治はアッチカの首都たるアテネをして藝術上、學問上の中心たらしめしと共に同時に內外貨物の大なる集散地と化せしめたのである、而して有名なプルタルクスは彼れのペリクレス傳に於てアテネに於ける商業が如何に活潑に營まれしかを最も巧に描寫せるのである、而して希臘人殊にイオニア人の事業慾は彼等をして單に內地方面の活動に止めしめずして更にフェニキア人の跡を逐ふて亞細亞の內地に經濟的侵略を試ましむるに至つたのである、斯くして黑海の沿岸に設けられた彼等の殖民地やキレネ及ニール河口に於ける彼等の商館は今や亞細亞方面に對する希臘人通商上の一基點たりしと共に印度及支那方面の產物はシリア方面の商人の媒介によらずして直接希臘本土に齎らさるゝの盛況を見るに至つたのである、それと共に希臘自身の生產物も亦た是等の商路によつて亞細亞方面に輸入せられしものである、吾人が既に前に述べしが如く希臘の地味が極めて貧弱であつたことは僅かにヒメトス山中の蜜橄欖油、葡萄酒等の二三種のものを與えしのみで、希臘其者に於て著しき意義を有せしものは農產物でなくて工產物であつたのである、即ち同國に於ける手工業の如きは既に早くより發達し、其結果、輸出向工業に於て見る可きもの多く、例者、中世のニュルンベルグに比す可きエギナは美術品其他各種の雜貨に於てテーベは車輛の產地としてエフェスス及ミチレネは何れも良質の香油を產する點に於てチオスとサモスは毛織物類、コリントとカルチスとは何れも金屬的製品を以て有名であつたのである、次ぎにアテネから多く輸出せられた商品は皮革的製品鑄物類、武器等で又、金銀細工や石彫細工等も此市の聲價を高めしものである、殊に希臘の各地に於て發見せらるゝのは多くアテネ市製造の陶器である、而して是等アテネ產の陶器にして現存せるものには或は人物或は花鳥等が常に描かれて居るのである、斯くの如く希臘の工產物が豐富であつた結果、其多くが輸出せられしと共に希臘人にして他方面に發展せんとせしものも亦た決して少くなかつたのである、今、之れが主なる中心點は北部亞弗利加方面ではナウクラチス、波斯方面ではニラルム、とクレネ、黑海方面では之れが湖北にありしタナイス、オルビア、オデスス、テオドシア湖南にはシ

ノベ、トラペゾント、ファシス等が存して居たのである、而して是等黑海地方は單に希臘方面から齎らされた商品の顧客たりしばかりでなく、黑海方面から輸出せられた建築用材はアッチカ地方が森林に乏しき結果、アテネの造船所に於て非常に歡迎せられ、其他、造船上に使用せられた麻布、黑色塗料、瀝青、皮革、蠟等の如きも何れも此地方の產する處となつたのである、又、希臘方面に於ける製造工業の發達につれてポンタス及トラキヤ方面より奴隷の輸入が最も重しとせられしと共に希臘の貧弱な國土が益々工業化するにつれて海外殖民地から食料品の輸入の必要を感じ斯くてアテネの如きは之れが需要の大部分を加へて魚類及獸肉の如き專ら黑海の沿岸地方から求めたのである、即ち今日クリム半島及南部露西亞に於て屢々發見せらるゝ希臘製の粧飾品及陶器は當時此方面の農產物と交換せられた證左を吾人に示すものである、之れを要するに希臘人は曩きにフェニキア人によつて開拓せられた世界的商路を更にポンタス方面迄延長するに至つたのである、而して一時世界的商業の中心點と見做されしアテネは其後斯くの如き優越性を失ふと共に希臘の商業的中心は幾多の方面に分たれ、東方に於て最も勢力を有せしものはエフェスス、スミルナ、ローヅス、チシリス等で、殊にアレキサンダーの世界的大帝國が崩壞せし以後に於て之れが物質的精神的文化の繼承者はシリアに於るセレウキヤ王國と埃及に於けるプトレメウス朝とである、殊に後者の政治的勢力は更にアレキサンドリアを以て學問藝術の中心點たらしめしのみならず、同時に古代に於ける最も大なる商業的中心として之れが商船はフェニキアの通商的範圍を越えて東部亞弗利加及印度方面に赴き其繁榮は羅馬の時代に於て更に層一層の見る可きものがあつたのである、轉じて羅馬に就きて見るに之れが經濟組織の中心が Domus (Domus は拉丁語又たは古代以太利語では單に家のみを意味するのでなくて其中には神祇、所有地、家族等を含んでゐるのである、而して此 Domus の理想とする處は出來る丈け自給自足の經濟を繰り返すに存したのである、斯くて家庭に於ける婦女子は奴隷を使役して糸を紡ぎ或は衣類を織り、或は穀物を碎くの仕事をなし、之れに對して男子は奴隷又たは農奴と共に野外の業務に從事するを常としたのである）の存せしに不拘、決して自足自給の經濟生活を繰り返せしものでなくして當時の社會には既に職業の分化即ち分業なるもの發生し例者、紀元

前四百五十一年に制定せられしと稱せらるゝ十二銅表の規定に於て木工、と金工とは獨立せる手工業であつたのである、殊に羅馬は海に近きと共にチベル河畔に位せし結果、自から附近地方に對する一個の中央市場と見做さるゝに至つたのであるが、只だ此中央市場がコリント及カルタゴの如く主要なる商業的都市たらざりし理由は主として之れが附近の住民が薄弱なる購買力を有せし農民階級であつたことである、然かも此貧弱なる脊地を有せし羅馬をして其後大に富ましめし時期は彼が其手を亞細亞、亞弗利加兩方面につけし以後のことで、殊に前者より羅馬に流入せし金銀は非常なる額に達し、是等の金額は何れも償金にあらざれば直接掠奪の結果で、斯くして貴金屬其他の財寶の流入は從來素朴の生活を送りし農民たる羅馬人をして著しく拜金の宗徒と化せしむるに至り、所謂、金儲を目的とする企業は羅馬の内外に發生し、當時最も利得多かりしものは土地の投機的賣買で之れに次で利益ありしは奴隷商賣で、即ち羅馬人は年少の奴隷を求めて之れに種々の技能を授け即ち彼等をして或は舞踏に或は料理に或は音樂等に通ぜしむることによつて極めて高價に市場に於て取引せしものである、又、鑛山事業の如き西班牙のカルタゲナの銀鑛に於て使役せし勞働者は一時、四萬人に達せしものである。最後に羅馬に於て最も旺んなりしは金貸業である、要するにブレンタノ教授の指摘した商業と戰爭と金貸業とは確かに羅馬に於ける資本主義の主要なる要素を構成せしものである。（未完）